



# モンゴル帝国の遺産

～ティムール朝・ムガル帝国を中心に～

第16期インターゼミ(社会工学  
研究会)・アジアダイナミズム班

学部生 : 高  
大学院生 : 阿達、禹、倉元、小柳、佐々木  
須貝、菅沼、杉、二本柳、山中  
指導教員 : 金美徳、平石隆司

# Agenda

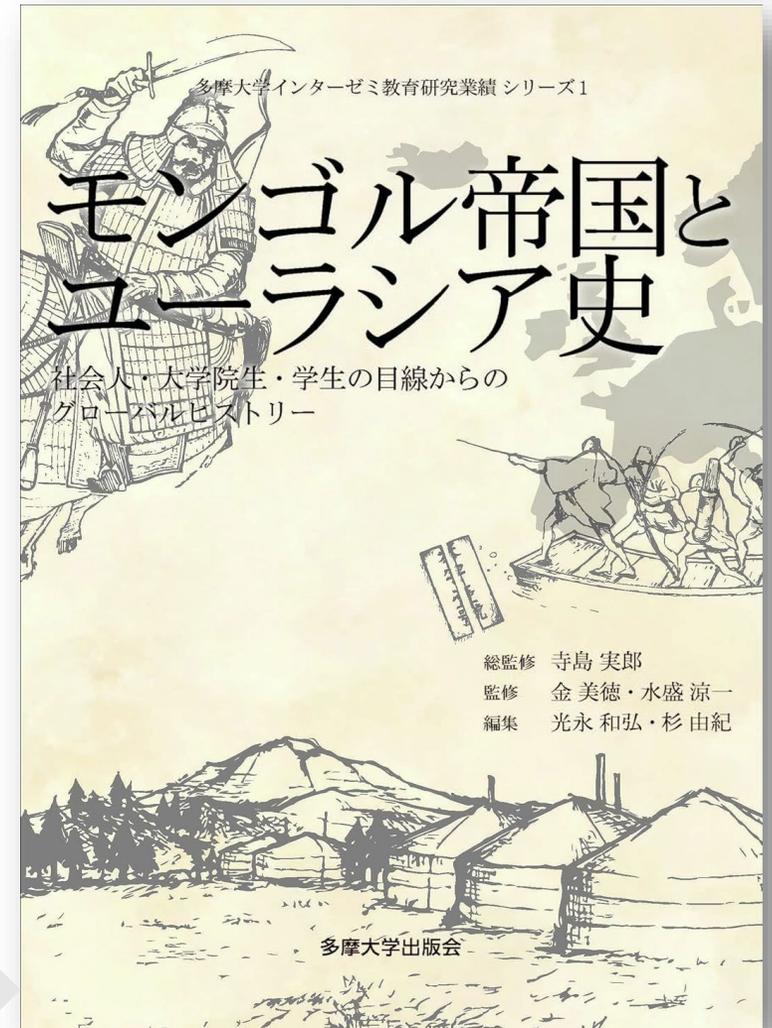
1. 振り返り（2017年～2023年 論文のテーマ）
2. 研究目的・方法
3. 2024年度の研究テーマ
4. 研究対象（個人研究報告）
5. フィールドワーク（全体研究報告）
6. まとめ

# 1. 振り返り（2017年～2023年 論文のテーマ）

## モンゴル帝国史の7年間の研究（今年で8年目！）

年度	タイトル	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89

659



※2023年度はモンゴル帝国が衰退していく過程で、帝国の東と西でモンゴルの支配を覆した明とロシアに着目し、それぞれの権力の交代に宗教が大きな影響を与えたことを研究した

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版されました(2023/3/30発売 全240頁)

## 2. 研究目的・方法

- ✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す
- ✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う
- ✓ フィールドワークは「**モンゴル・インド大使館**」や「**専門研究者**」にヒアリングを行う

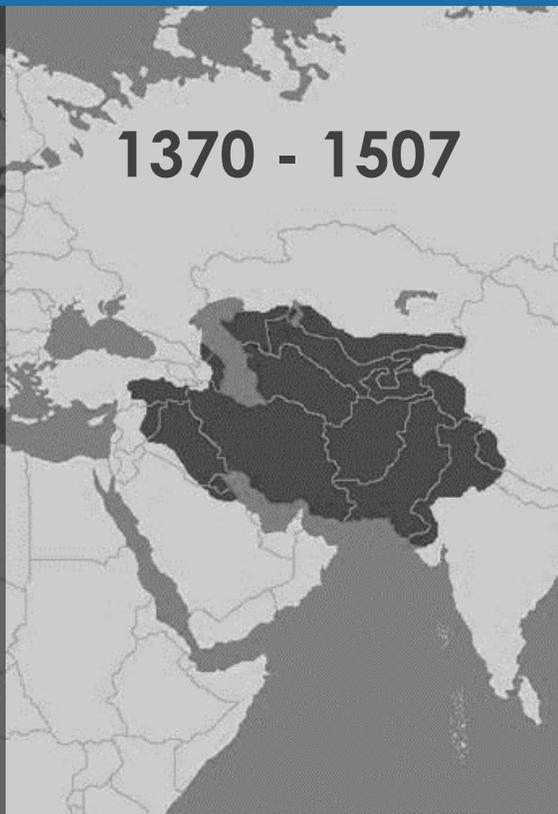
### 3. 2024年度の研究テーマ

## モンゴル帝国の遺産 ～ティムール朝・ムガル帝国を中心に～

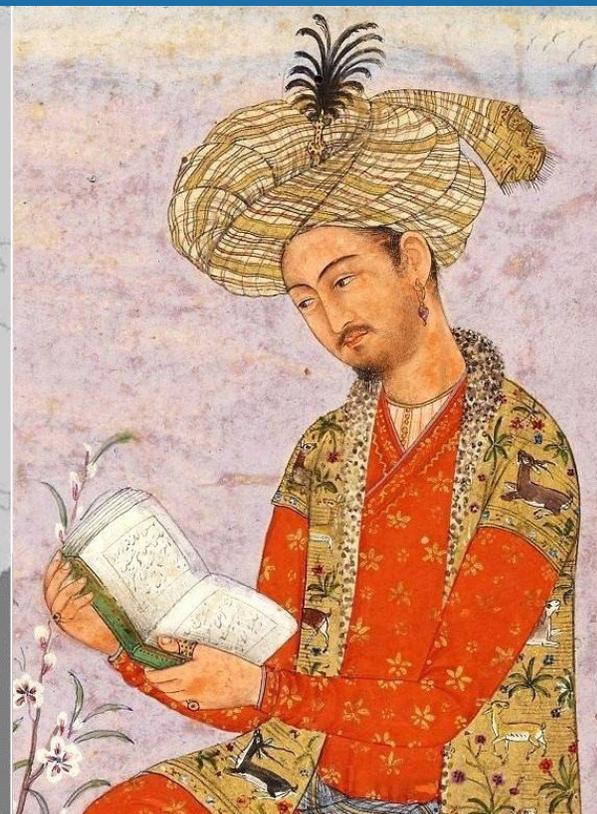


Temur - ティムール帝

1370 - 1507



ティムール朝  
(中央アジア)



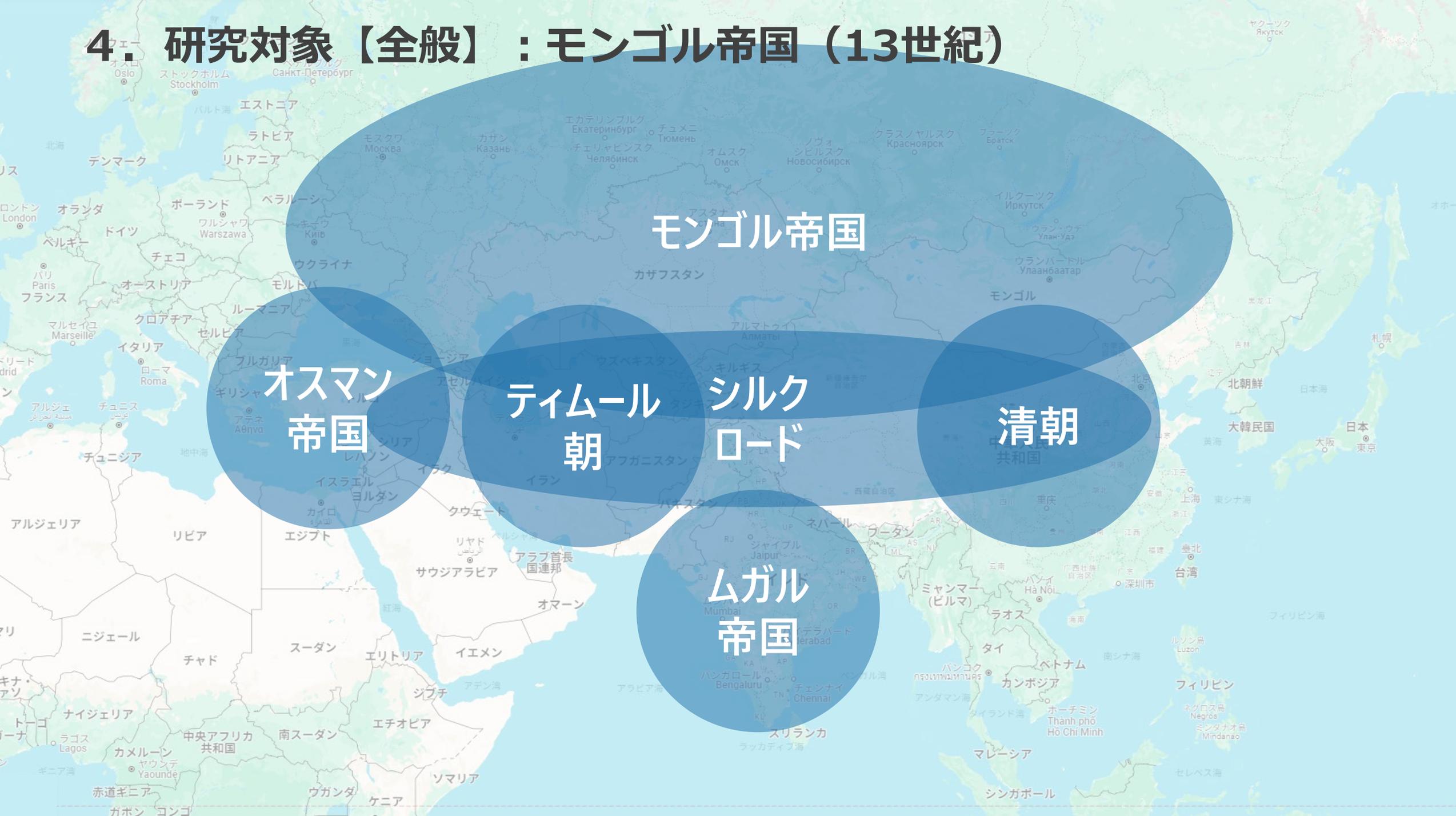
Bābur - バーブル帝

1526-1857



ムガル帝国  
(インド)

# 4. 研究対象【全般】：モンゴル帝国（13世紀）



モンゴル帝国

オスマン  
帝国

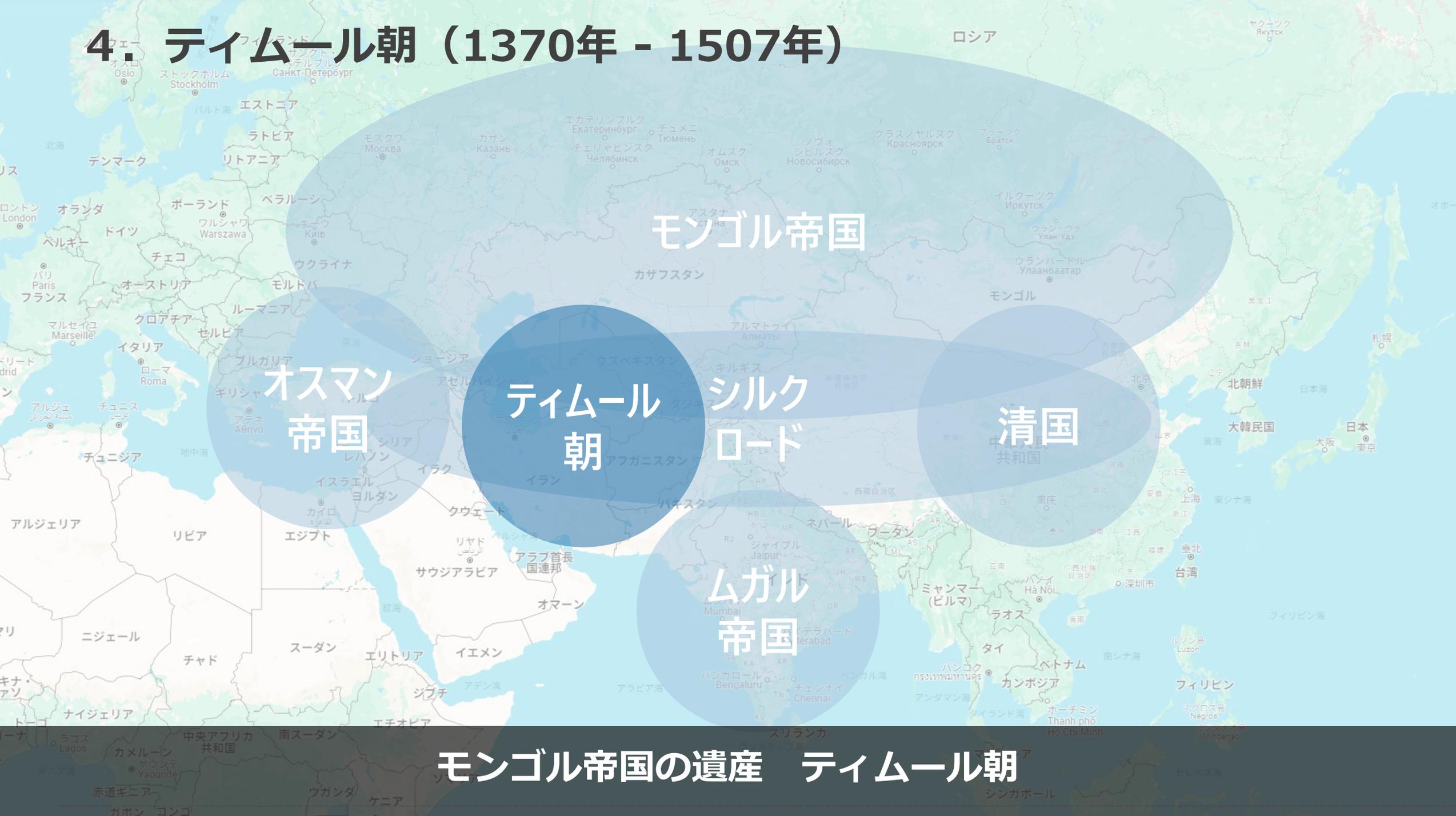
ティムール  
朝

シルク  
ロード

清朝

ムガル  
帝国

# 4. ティムール朝 (1370年 - 1507年)



モンゴル帝国

オスマン  
帝国

ティムール  
朝

シルク  
ロード

清国

ムガル  
帝国

モンゴル帝国の遺産 ティムール朝

# 阿達敏洋：モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システム変遷の考察

## 問題意識

- モンゴル帝国繁栄時の統治システム（行政、社会、経済）はどう形成され、ティムール朝では、どう継承されたのか考察する。

## 研究報告

- モンゴル帝国では支配体制としてチンギス・カンに直隷するケシク（近衛軍団）が中央政府として存在し、両翼を千戸（ミンガン）グループを配置し、統治を進めた。
- 千戸（ミンガン）は百騎、十騎と各長で構成され、遊牧民集団体制を敷いていた。
- モンゴル帝国では銀を共通の財貨とする徴税・財政体制であった。
- クビライ王朝時に塩を商業税として採用し、塩の取引券（塩引と呼び高額な紙幣の役目）を販売し、政府収入とした。主要都市、港を通過する際の通過税があったが、撤廃し、物流を促進し、交通網を整備・維持する。  
ティムール朝では塩にさらに絹を追加し商業、経済発展に繋げる。

## 今後の方向性

- ティムール朝での統治・支配体制を考察し、遊牧民と定住民への統治システムに違いがあるのか政権に与えた影響を考察する。
- 紙幣としての塩の取引券価値が下がった際、商業・経済にどんな影響があり、商人・住民の統治をどう変えていったのか考察する。

# 杉由紀：ティムール帝国におけるモンゴル系支配、現代イランへの影響の有無

## 問題意識

- 現在のイランとその周辺は、イル・ハン国(1260-1353年)、次いでティムール朝(1370~1507年)とモンゴル系の支配下にあった。モンゴルの支配はイラン地域にどのような影響を残したか、残さなかったか。現代のイランを理解する上での示唆はあるか。

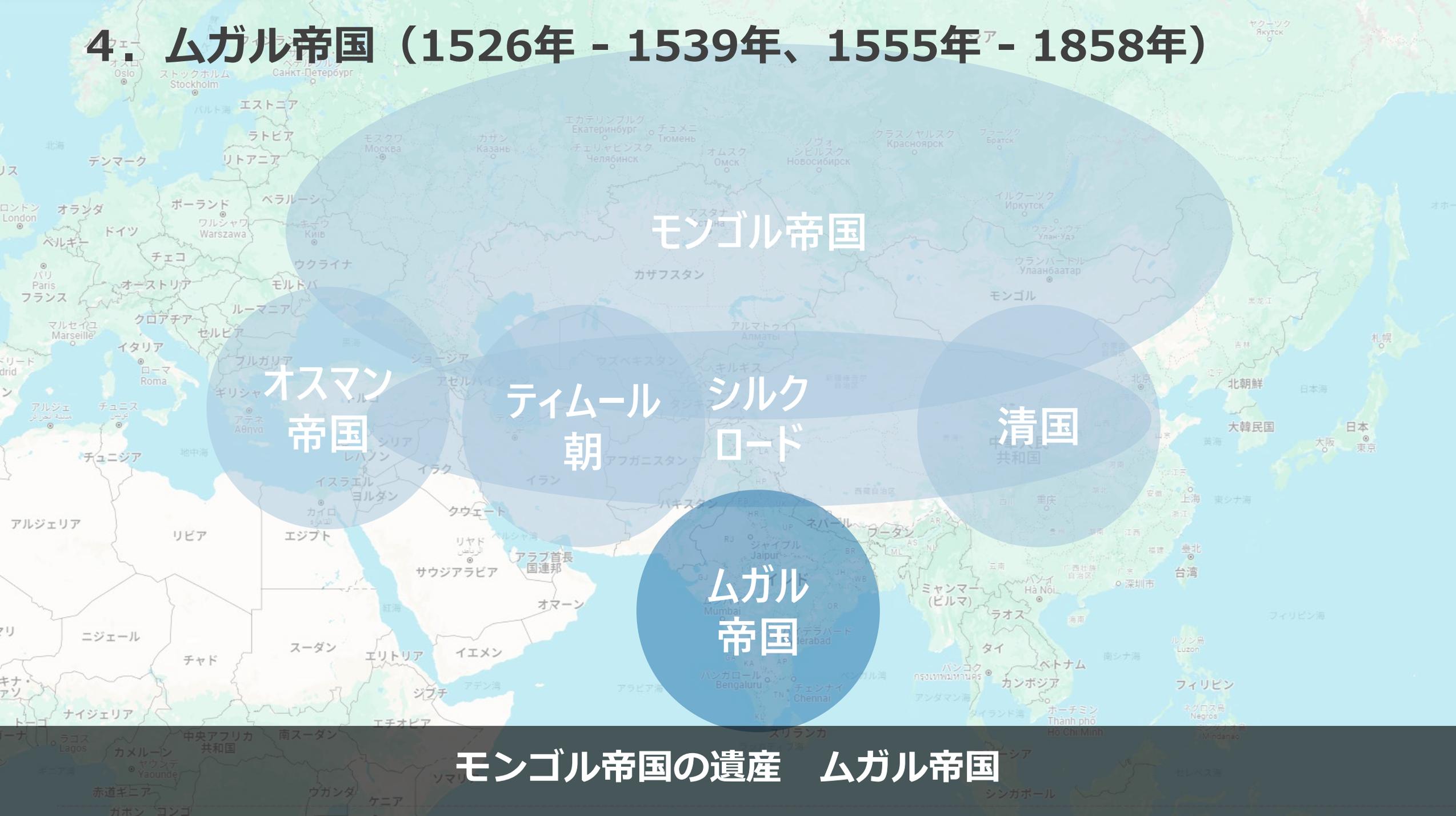
## 研究報告

- ティムール朝では、ペルシア系の官僚や大臣が多く活躍し、政治経済では主にペルシア語が使用され、モンゴル系為政者はペルシアの知識や技術を活用し、共存した。モンゴル帝国および他のモンゴル支配地域との共通点が多いといえそうである
- ティムールは侵攻した各地から職人や芸術家を都に集め、ペルシア語歴史書、建築やインフラ(水、病院、学校)など、独自の融合イスラム文化ともいえるものが発展した。また、イスラム教シーア派がこの地域で定着した
- ティムール朝時代には、陸のシルクロードが衰退したと言われる。その要因について継続調査する(戦乱のためか？ ティムールと後継者の統治の問題か？ その他の理由か？)

## 今後の方向性

- 陸のシルクロードが衰退した要因を探る。当時の周辺国との関係、海路貿易が活性化した要素などを整理する
- 独自の融合文化の特徴と発展の経緯を深掘りする。それが現在のイランの文化、地理的・地政学的環境にどのような影響を残したか、残さなかったかを整理する

# 4. ムガル帝国 (1526年 - 1539年、1555年<sup>ア</sup> - 1858年)



モンゴル帝国

オスマン  
帝国

ティムール  
朝

シルク  
ロード

清国

ムガル  
帝国

モンゴル帝国の遺産 ムガル帝国

# 佐々木真友美：ムガル帝国創設者・バーブルからみるインドとモンゴル帝国の考察

## 問題意識

- ムガル帝国の創設者・バーブルの人物像に迫り、バーブルから見たインドの様子と状況、侵攻の背景、また、バーブルにとってのモンゴル帝国とは如何なるものだったのかを探る。

## 研究報告

- バーブルの父はティムールの血をひくアブー・サイード・ミルザーの息子で、母はチンギス・カンの子孫で、ユヌス・ハーンの孫に当たる。
- 文人としても異彩を放つバーブルが残した回想録『バーブル・ナーマ』により、人物像が思い浮かぶようなエピソードを知ることができる。
- ヒンドゥスターン（当時のインド）は、1526年の6回目の遠征にて、パーニーパットでデリーのローディー朝のスルターン・イブラーヒームの軍勢を撃破し、デリーとアーグラを占領したが、長所が少ないと評価したにも拘わらずインドにこだわった理由には、様々な事情があると考えられる。
- 切った敵の首を漆喰で固めた「首の塔」による征服の見せしめなど、チンギス・カンやティムールといった祖先たち以来の伝統も取り入れていた。

## 今後の方向性

- インド侵攻にこだわった背景を深掘りし、考察する。
- モンゴル帝国の影響について深掘りし、考察する。

# 須貝直行：モンゴル帝国がムガル帝国に与えた影響

## 問題意識

- モンゴル帝国からムガル帝国を経由し現代のインドに与えた影響はどのようなものか？  
宗教的、政治的、文化的な視点から研究を行う

## 研究報告

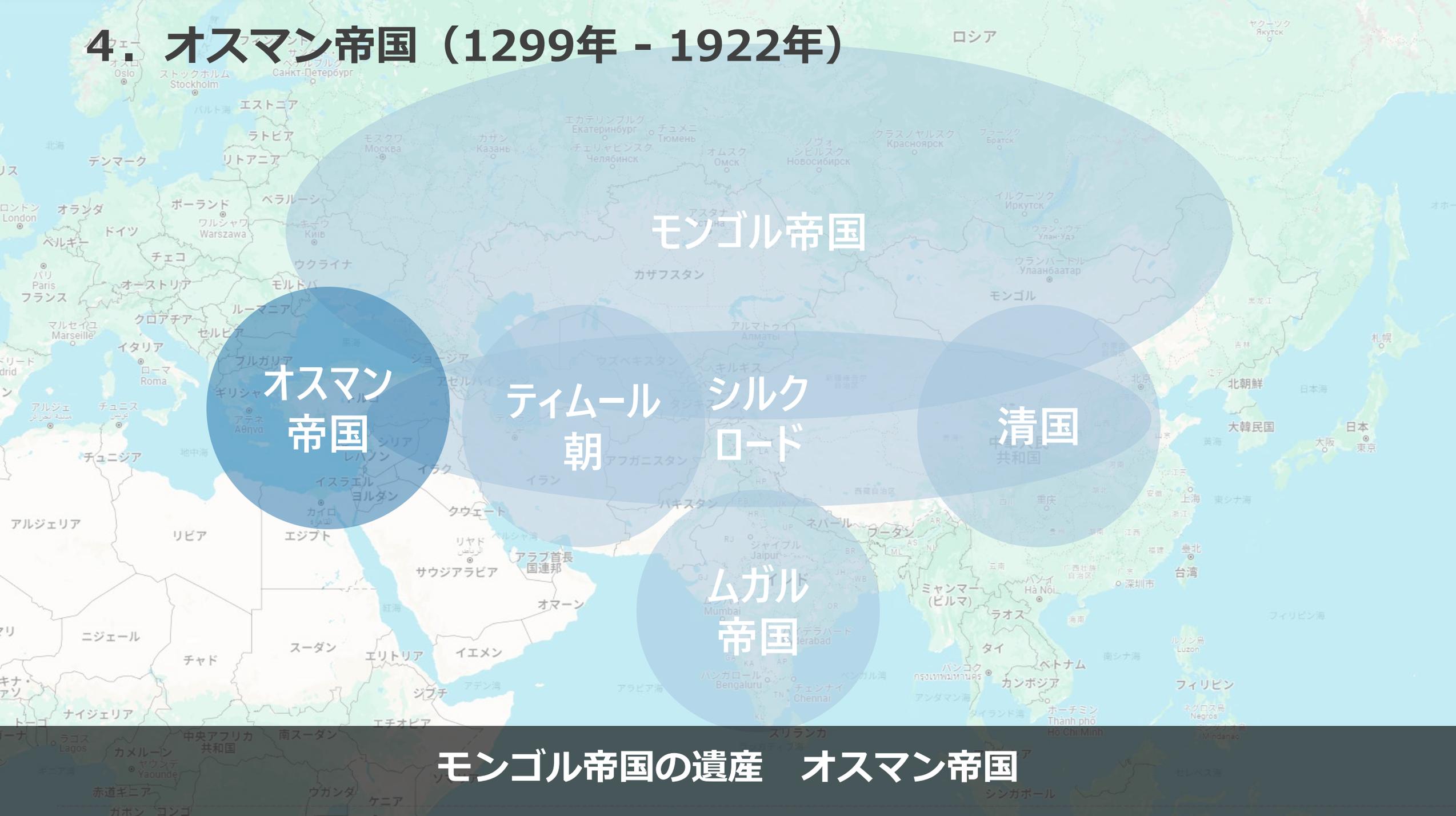
- モンゴル帝国とムガル帝国の宗教的寛容性
  - モンゴル帝国と同じ宗教的寛容政策をとった第3代ムガル帝国皇帝アクバルによりムガル帝国は反映していった。帝国の繁栄には、多様な人を受け入れる宗教的寛容性が重要である。
  - 第6代皇帝であるアウランゼーブ大帝以降、宗教的寛容政策から逸脱し、より厳格なイスラム政策が採られたため、多様な宗教が共存するムガル帝国の統治を困難にし、帝国の衰退につながった。
- タージ・マハルから見る文化的融合
  - タージ・マハルはムガル帝国の象徴でありながら、その根底にはモンゴル帝国との深いつながりが存在している。モンゴル帝国がペルシャを支配したことで、ペルシャ建築知識の要素が広まりムガル建築に影響を与えた。
- ソヨンボ文字から見るインドがモンゴルへ与えた影響
  - ソヨンボ文字は、モンゴル帝国とムガル帝国、そしてインドの間の文化的、精神的、政治的なつながりを象徴する重要な要素であり、これらの地域間の長期にわたる相互影響の証拠となっている。



## 今後の方向性

- モンゴルとインドの現代に繋がる関係性については徐々に明らかになってきているが、さらに深い影響について研究を進めたい

# 4. オスマン帝国 (1299年 - 1922年)



モンゴル帝国

オスマン  
帝国

ティムール  
朝

シルク  
ロード

清国

ムガル  
帝国

モンゴル帝国の遺産 オスマン帝国

# 倉元貴子：モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマントルコの繁栄と海運

## 問題意識

- オスマン帝国はかつてモンゴル帝国から逃げた小アジアにできた小さな国であった。混沌とした時代に、小国から飛び出し、領土を拡大し大国へと駆け上がったオスマントルコ。小国からスタートしたオスマントルコは、どうやって世界的な覇者への階段を上ってきたのか。通商、貿易の観点から、成功した海運のコア・コンピタンスと、組織プロセスについて明らかにする。

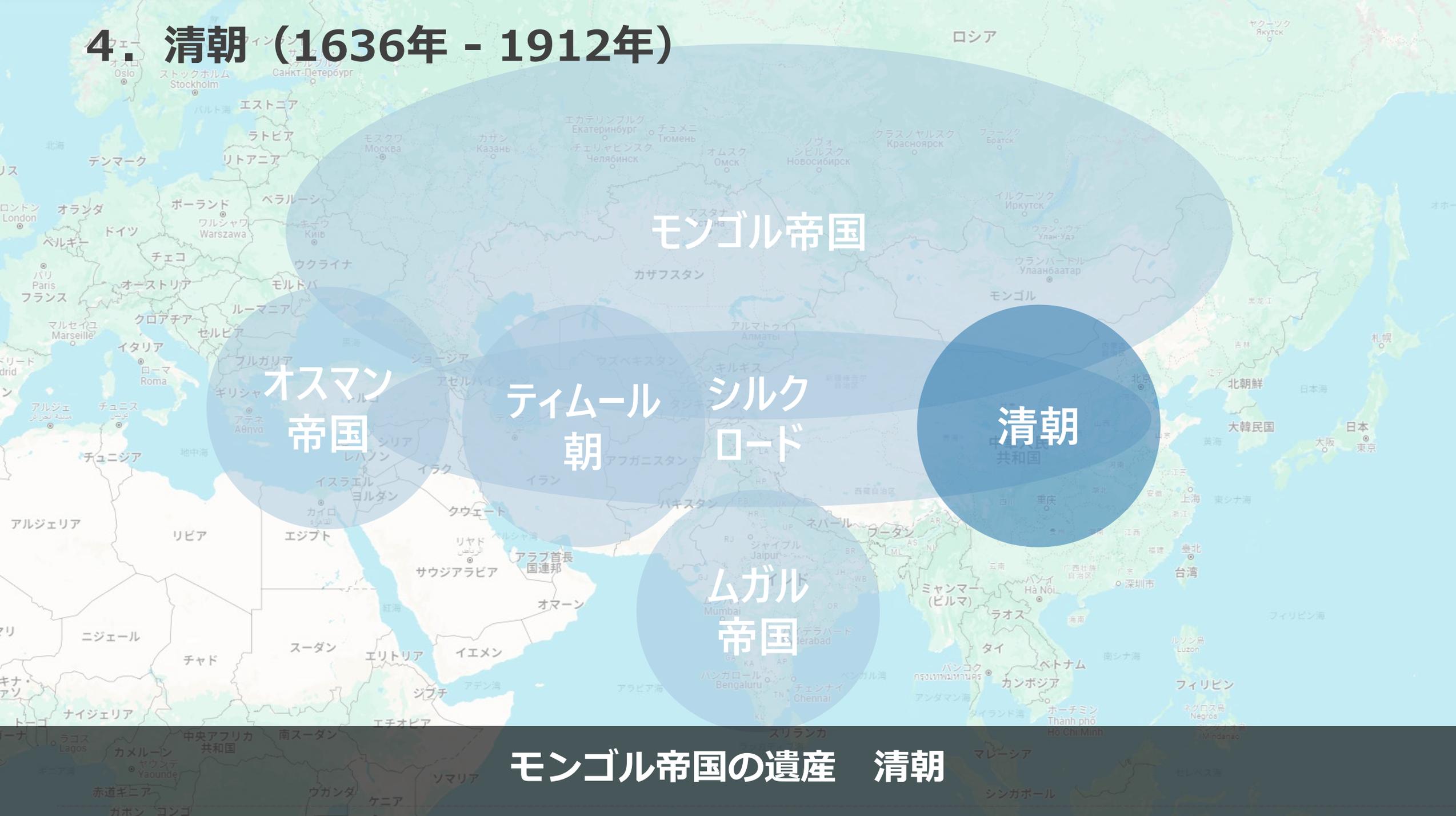
## 研究報告

- 1070～1200年間、西アジア一帯はセルジューク朝と呼ばれる国が納めていたが、1200年後半ごろモンゴル帝国が進撃してきたために、セルジューク朝だけでなく、他にも色々な家が撤退を始め、その撤退の中に「オスマン家」がいた。オスマン家は、アナトリア地方で落ち着いた。
- 14世紀にトルコ人がつくったオスマントルコ帝国は、イスラーム教国で、最初は小アジアに位置する小さな国であったが、徐々に領土を広げ地中海を制覇し大国になった。
- 「セリム2世」のもとでは、国内の経済政策が強化されヨーロッパ諸国の商人（フランス商人）を、積極的に受け入れた。これを「カピチュレーション政策」と言い、ヨーロッパ商人に対してオスマン領内での「居住、貿易、通商」を許可し、国内市場を発展させた。
- 領土内にはアラブ、エジプト、ギリシア、スラヴ、ユダヤ人など、多様な人種・民族をかかえることで、経済を発展させた。
- 人、モノ、経済が集積した。当時のイスタンブール港は、多くの商人や船で賑わい、異なる文化が交差する場所であった。
- 一方で外政においては、引き続き東地中海の覇権をにぎり、海洋交易を強化した。16世期・中頃までに、バルカン半島、西アジア、北アフリカにまたがる「大帝国」を築いた。この時点でオスマン帝国／ヨーロッパ諸国とのあいだに、力の差はほぼなかった。

## 今後の方向性

- オスマントルコ帝国では、海運は、貿易だけでなく、**軍事的戦略性においても**、軍事的な優位性を保つなど、領土拡大や外交政策において重要な役割を果たしていた。海運の重要性を明らかにすることで、経済や社会構造を明らかにしたい。

# 4. 清朝 (1636年 - 1912年)



モンゴル帝国

オスマン帝国

ティムール朝

シルクロード

清朝

ムガル帝国

モンゴル帝国の遺産 清朝

# 菅沼孝陽：モンゴル帝国、清朝共通の統治理念としての「チベット仏教」

## 問題意識

- 元・清朝の諸民族を包含した「大きな中国」支配には、「チベット仏教」が重要な役割を果たしたのではないか。
- なぜ「チベット仏教」はチベットのみならずモンゴル族、満洲族等に広く受け入れられたのか。
- 異民族王朝である元・清朝は、チベット仏教をどのように漢族支配に利用したのか。
- 現代の「チベット問題」の本質は何か。



## 研究報告

- チベット仏教は、モンゴル帝国の後継国家にとって「チンギス統原理」と並ぶ統治理念だった。
- チベット仏教は、13世紀初頭にイスラム勢力に滅ぼされた最後のインド仏教（金剛乗仏教）が、ヒマラヤを越えて生き延びた、インド仏教の正当な継承者、いわば「正教」とみなされた。（ただしヒンドゥー教の影響が色濃い）  
（上座部仏教は既に東南アジアに南伝、大乘仏教は中国、朝鮮、日本に北伝してインドには残らなかった。）
- フビライ・カーンと、彼が帰依した「国師」チベット高僧パスパとの関係が後世の政教相互依存モデルとなった。  
（施主と応供、すなわち檀家と寺の関係。教団が支配者を仏法を護る転輪聖王として認定、宗教権威を与え、代わりに支配者は教団を保護する構図。）
- 明朝による北走後のモンゴル王族アルタン・カーンは、高僧ダライ・ラマ3世に転輪聖王と認められ、勢力を回復。
- 清朝第2代皇帝、ホンタイジは、服属させたモンゴル・チャハル部から、伝国璽（政治権威）とパスパ製作の仏像（宗教権威）を承継、自らをモンゴル帝国の正当な後継王朝と位置づける。
- 清朝第6代皇帝、乾隆帝はチベット高僧よりフビライ・カーンの転生、文殊菩薩の化身と認定、その権威で内陸アジア遊牧民と漢族中華世界をともに支配、全盛期を現出。（その象徴が長城の北、承德・避暑山荘（熱河離宮）と外八廟）

## 今後の方向性

- 漢民族の統治理念「華夷思想」と、チベット仏教の民族を超えた普遍的世界観を比較、検証する。
- 中国の「華夷秩序」から「近代的主権国家・国民」への転換と、チベットの政教一致政体との相克を考察する。

# 禹幸玉：モンゴル帝国時代が、中国の多民族・多宗教に与える影響

## 問題意識

- 中国に残されたモンゴル帝国の子孫・民族・宗教の特徴
- 元朝・ティムール帝国に対する中国人の評価・残された遺産

## 研究報告

- **モンゴル帝国時代に、イスラム教徒が大量に中国に入り、急速に発展した重要時期であり、中国歴史上はじめて少数民族の大統一国家になった。**（何孝荣 中国明清宫廷研究中心（挂靠历史学院）著：【明朝宗教】）
- **中国におけるモンゴル帝国の子孫は、イスラム教徒が10民族とモンゴル族である。**  
イスラム教の内訳：回族、ウイグル族、カザフ族、トンシャン族、キルギス族、サラール族、タジク族、ウズベク族、ボウナン族、タタール族
- **「モンゴル帝国の歴史は中国史の一部なのか？」**  
杉山先生（日本人）の著書では、大モンゴル帝国の遺産のうち、中国関係のものはほとんどない。  
姚大力（中国复旦大学历史地理研究中心教授）の著書（「中国史における元の意義」では、元の統一が、中国に多文化主義という偉大な成果をもたらした。歴史的中国の空間的範囲・現在の中国の地図で定義すると、中国歴史の一部分であることに間違いはない。
- **ティムールの国家設立過程において、イスラム教は対外進出のバナーであり、精神的支えとして、イスラムとモンゴルのバランスは取れていた。**  
なお、ティムール朝の軍隊の主力はモンゴルの遊牧民であり、半移動・半定住が理想の生活様式。反対にイスラム教徒は定住生活が主流である。  
遊牧民の伝統とイスラムの文化伝統の融合において、各民族と宗教はそれぞれの特徴があり、完全融合はできない。長く維持できない原因である。张文德 中国贵州师范大学 著：【论伊斯兰教对中亚帖木儿王朝的影响】）

## 今後の方向性

- 各民族の特徴を探る
- モンゴル帝国その後の元朝・ティムール帝国と明朝との関係について調べる

## 問題意識

モンゴル帝国の経済戦略、地政学的な戦略が清、現代の中国にどのような影響を与えてきたかを考察する。また、ヨーロッパ諸国の帝国主義、産業革命にどのような影響を与えたかを考察する。

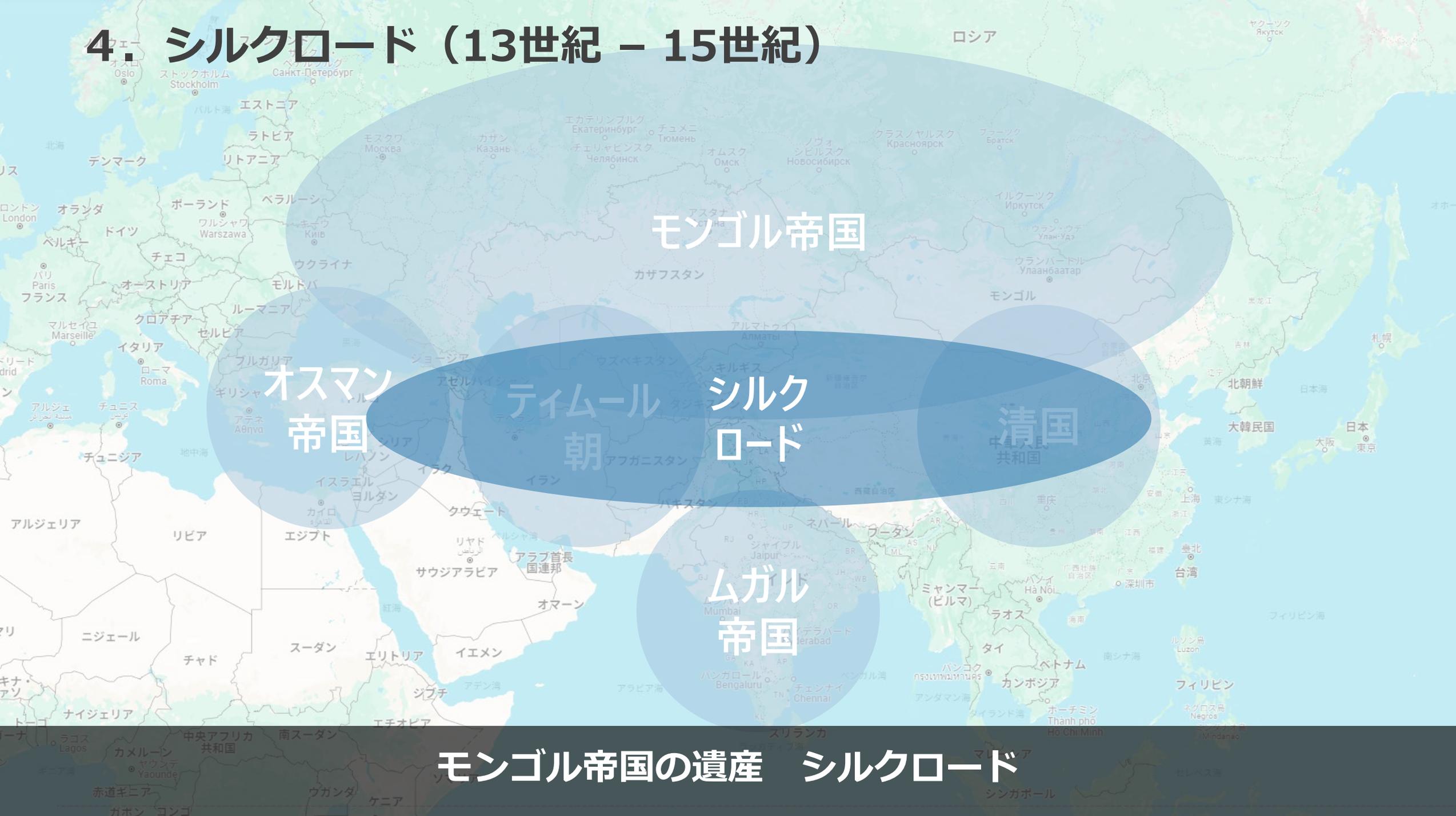
## 研究報告

- モンゴル帝国がアジア経済を活性化させた要素としては①貿易の促進：モンゴル帝国はシルクロードの保護と改善に尽力したことにより、とりわけ中国と中東、ヨーロッパとの間の貿易が大幅に増加し、アジアの経済に大きな利益をもたらした。②安定した統治：モンゴル帝国は広範な領土を統一的に支配し、治安を維持した。③通貨の統一と金融システム：モンゴル帝国は紙幣を導入し、通貨の統一を図った。これにより、経済取引が円滑に行われるようになり、商業活動が促進された。
- 主要な産業への影響としては①商業と貿易：シルクロードを通じた貿易が活発化し、シルク、香料、茶、宝石、金、銀などの高価な商品が取引された。②農業：モンゴル帝国は農地の保護と灌漑システムの整備を進め、農業生産を奨励した。これにより、食料生産が増加し、人口の増加と経済の安定が図られた。③手工業と工芸品：モンゴル帝国は各地の工芸品や手工業品を広範に取引し、職人や工芸品産業が発展した。特に中国の陶磁器や絹織物は高い評価を受け、国際市場での需要が高まった。④交通と物流：モンゴル帝国は道路網や通信網を整備し、物流を円滑にした。⑤軍需産業：強力な軍隊を維持するために、武器や装備の製造が重視された。これにより、軍需産業が発展し、経済活動の一環として軍事技術の革新が進んだ。
- 鉄砲の技術がアジアからヨーロッパに伝わる過程①宋中国：火薬の発明と最初の火薬兵器（如火槍、火箭など）の開発は中国で行われた。これが火器技術の基本となり、後の鉄砲技術の基盤となった。②モンゴル帝国：モンゴル帝国の広範な支配領域を通じて、火薬や火器の技術が西方に伝わったとされている。モンゴルの拡大と交易路の整備が技術伝播の一助となった。③アラブ世界：火薬技術は中国からイスラム世界にも伝わり、さらに改良が加えられた。アラブの学者や技術者たちは火薬や火器の知識をヨーロッパに伝える重要な橋渡し役を果たした。④オスマン帝国：オスマン帝国は火器を積極的に使用し、その技術をさらに発展させた。オスマン帝国の西進とともに、火器技術もヨーロッパに広がった。
- 直接的に鉄砲技術をヨーロッパに伝えたのはこれらの国々の複合的な影響であり、一国のみが単独で技術伝播を担ったわけではない。各国が連携し合い、技術を共有・改良しながら、最終的にヨーロッパに到達したと言える。鉄砲、鋼が帝国主義を助長させ、産業革命を経て西洋優位な世界になっていった。

## 今後の方向性

- モンゴル帝国、清（夷狄）が現代の中国にどのような影響を与えているかを研究していきたい。
- モンゴル帝国の経済戦略、軍需産業がヨーロッパの産業革命、帝国主義にどのような影響を与えていったのかを鉄・鋼をキーワードに追いかけていきたい。

# 4. シルクロード (13世紀 - 15世紀)



モンゴル帝国

オスマン  
帝国

ティムール  
朝

シルク  
ロード

清国  
中華人民  
共和国

ムガル  
帝国

モンゴル帝国の遺産 シルクロード

# 小柳愛理：モンゴル帝国の交易ネットワークが世界の文化や芸術の発展に寄与した

## 問題意識

- モンゴル帝国はその広大な支配領域と活発な交易活動を通じ、文化や芸術の発展に寄与した。中でも陶器の発展と世界への伝播について探る。「陶磁の道」について。

## 研究報告

- モンゴル帝国時代のユーラシア大陸全体に広がる広大な交易ネットワーク。内陸部はオゴイ・ハンの時代に整備された駅伝制（ジャムチ）、海上では杭州（南宋時代の臨安）、泉州、広州などの貿易港、大運河により中国の経済の中心地の江南と首都の大都が結ばれた。これらの交通の発展によりペルシア湾、インド洋、東アジア、エジプトなどへ交易が広がった（主に海運）
- モンゴル帝国は13世紀から14世紀にかけて、東西貿易路を支配し、交易を活発化させた。東西の文化的交流を促進し、中国の陶磁器技術やデザインが西アジアに広まるきっかけとなった。特に、コバルトブルーがアラビア世界からもたらされたことで、染付技術が磁器に用いられ、中国から西アジアに伝わり、現地の陶器に影響を与えた。



## 今後の方向性

- 陶器に使われる色彩やデザイン変化による時代の変化
- モンゴルの交易ネットワークを通じて世界へ広がり、今も残っているものは？日本にはどのような形で残っているか？

# 二本柳誠一：シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察する

## 問題意識

- モンゴル帝国やティムール帝国がシルクロードをどのように制御し、そこを利用していた商人がどのような行動をとっていたかを研究し、ツーリズムの起源を考察する。

## 研究報告

- シルクロードは、モンゴル帝国の整備された駅伝網によって発展し、**ヒト・モノ・文化の交流が空前の盛況**を呈した。
- シルクロード貿易は、**軽くて高価な奢侈[シャッ]品（贅沢品・威信財）貿易**であった。
- シルクロードを通して**文化交流が起こり、その痕跡が各地に残っている**。
- シルクロードは過酷な自然環境や盗賊などの横行する危険な場所の往来であり、**キャラバン隊を編成して安全性を高めていた**。
- **旅の途中で立ち寄る土地には、宿泊施設が作られ、道中必要になる雑貨や武器などを扱う商人や職人が集まり儲けていた**。

## 今後の方向性

- モンゴル帝国とティムール帝国がシルクロードに与えた影響を整理する。
- キャラバン隊の旅の行動を解き明かし、現在のツーリズムの起源を考察する。
- その上で、日本のインバウンド市場に対する提言に繋げる。



# 5. フィールドワーク

## モンゴル大使館訪問



- 面談日時 : 8月20日 (火) 15:00~17:00
- 面談者 : 先方2名 参事官・領事部長 (ルンダ・ダワ・ジャルガル)、三等書記官 (マイツェツィグ・シエバグドルジ)  
当方7名 学部生 (高)、大学院生 (阿達、佐々木、菅沼、二本柳)、指導教員 (金、平石)、
- 意見交換内容 : モンゴル帝国設立後の、ティムール朝、ムガル帝国への歴史変遷について
  - ①モンゴル国学校では生徒にどんな歴史を教えているのか？
  - ②シルクロードの役割としてどのような文化交流であったのか？衰退する時期はあったのか？
  - ③陶器はモンゴル帝国の文化・芸術の発展に寄与したのか？
  - ④徴税の仕組みはあったのか、銀・塩・絹等徴、国に収める仕組みは変わっていったのか？
- 得たこと : モンゴル人から見た歴史認識や多民族国家の特徴など、幅広く学ぶことが出来た



# 5. フィールドワーク

## 研究者インタビュー



□ リーダー：杉 ※サポート役：平石先生

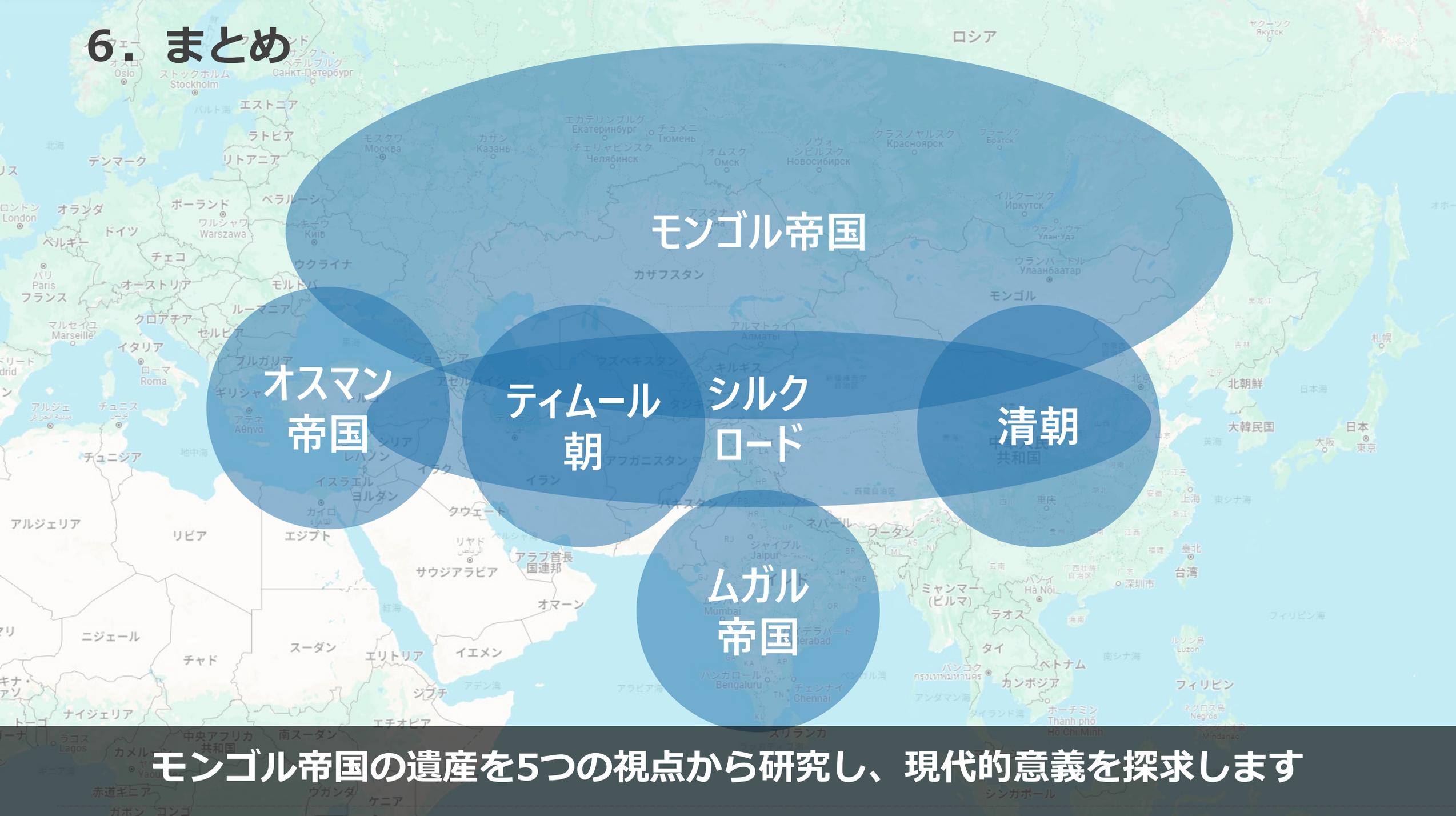
□ 候補

- ・ 小松 久男（こまつ ひさお）：著書『中央ユーラシア史』（編）『岩波イスラーム辞典』（編）など。  
（東京大学名誉教授、東洋文庫研究員）
- ・ 今村 栄一（いまむら えいいち）：論文『1470-80年代モスクワ大公官房による文書庫所蔵文書の再検討』（「社会文化形成」第5号に収録）など。（名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパス・プロジェクト調整員）
- ・ 和崎 聖日（わざき せいか）：共著『中央ユーラシア文化事典』、『イスラーム文化事典』など。  
（中部大学人文学部准教授）

□ スケジュール

- ・ 9月～11月

# 6. まとめ



モンゴル帝国

オスマン  
帝国

ティムール  
朝

シルク  
ロード

清朝

ムガル  
帝国

モンゴル帝国の遺産を5つの視点から研究し、現代的意義を探求します



ご清聴ありがとうございました

# appendix

# 歴史年表

年代	モンゴル・中国史	ティムール史	ムガル史	日本史
8-13世紀	705年 武則天失脚,唐の復活 755年 安史の乱 1206年 <b>モンゴル建国</b> 1271年 国名を <b>元</b> に			894年 遣唐使廃止 1185年 鎌倉幕府成立 1274年 文永の役 1281年 弘安の役
14-16世紀	1305年 元が5つに分裂  1368年 <b>明 建国</b> 1383年 明 海禁政策開始   1567年 明 海禁を緩和	1336年 建国者ティムール(タメルラン)の誕生 1370年 ティムールがサマルカンド征服、 <b>ティムール帝国成建国</b> 1393年 ティムールバグダードを攻略 1398年 ティムールによるデリー遠征 1402年 アンカラの戦い 1405年 ティムール死去  1507年 <b>ティムール帝国滅亡</b>	1483年 ムガル帝国の建国者バーブルの誕生 1504年 バーブルがカーブルを征服 1526年 第1次パーニーパットの戦い バーブルがロディー朝を破り、 <b>ムガル帝国建国</b> 1530年 バーブル死去 1556年 アクバル即位 1564年 シズヤ(人頭税)廃止	1338年 室町幕府成立 1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化)  1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱  1587年 豊臣秀吉によるバテレン追放令
17-18世紀	1616年 <b>清 建国</b>  1644年 明が滅亡 満州族である清の時代へ		1600年 イギリス東インド会社設立 1605年 アクバル死去  1658年 シャー・ジャハーンによりタージ・マハル完成 1679年 シズヤ(人頭税)復活  1757年 プラッシーの戦い	1603年 江戸幕府成立 1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令

# 歴史年表

年代	モンゴル・中国史	ティムール史	ムガル史	日本史
19-20 世紀	<p>1911年 辛亥革命</p> <p>1912年 清が滅亡 中華民国誕生</p>		<p>1803年 第2次マラータ戦争勃発</p> <p>1813年 茶以外のインド貿易の独占権廃棄</p> <p>1817年 第3次マラータ戦争勃発</p> <p>1853年 鉄道開通</p> <p>1857年 インド大反乱(シパーヒーの反乱)が起こり、ムガル帝国が事実上滅亡</p> <p>1858年 イギリス東インド会社解散 インド帝国がイギリスの直接統治下に置かれる</p> <p>1947年 インド・パキスタンがイギリスから独立</p> <p>1950年 インド共和国が成立</p>	<p>1858年 米修好通商条約</p> <p>1868年 明治維新</p> <p>1910年 韓国併合</p> <p>1972年 日中国交正常化</p>

# 参考文献 -1

## 【書籍：計38件】

- 1 . 荒川正晴 他 『構造化される世界 14～19世紀 (岩波講座世界歴史11)』 (岩波書店、2022)
- 2 . 荒川正晴 他 『モンゴル帝国と海域世界 12～14世紀 (岩波講座世界歴史 10)』 (岩波書店、2023)
- 3 . 荒川正晴 他 『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀 (岩波講座世界歴史13)』 (岩波書店、2023)
- 4 . 石濱裕美子 『物語 チベットの歴史——天空の仏教国の1400年』 (中公新書、45017)
- 5 . 何孝榮 『明朝宗教』 (南京出版社、2013)
- 6 . 藍琪 『帖木儿帝国与明朝的关系』 (中亚史 第四卷 第二章、2018)
- 7 . 小笠原弘幸 『オスマン帝国 繁栄と衰亡の600年史』 (中央公論社、2018)
- 8 . 沖本克己・菅野博史編集 『中国文化としての仏教-新アジア仏教史08 中国Ⅲ宋元明清』 (佼成出版社、40422)
- 9 . 沖本克己・福田洋一編集 『須弥山の仏教世界-新アジア仏教史09 チベット』 (佼成出版社、40269)
- 10 . 辛島昇 他 『南アジア史 (新版 世界各国史 7)』 (山川出版社、2004)
- 11 . 川口琢司 『ティムール帝国』 (講談社、2014)
- 12 . 菊池秀明 『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』 (講談社、2022)
- 13 . 木谷勤 『帝国主義と世界の一体化 世界史リブレット40』 (山川出版社、1997)
- 14 . 木下光弘 『中国の少数民族政策とポスト文化大革命——ウランフの「復活」と華国鋒の知られざる「功績」』 (明石書店、44228)
- 15 . 久保一之、木村暁、井上治 『ポスト・モンゴル期』 (山川出版社、2018)
- 16 . 黒田勝彦、小林ハッサル柔子 『文明の物流史観』 (成山堂書店、2021)
- 17 . 小林亮介 『近代チベット政治外交史——清朝崩壊にともなう政治的地位と境界』 (名古屋大学出版会、45323)
- 18 . 小松香織 『オスマン帝国の海運と海軍』 (山川出版社、2020)
- 19 . 小松久男 他 『新版世界各国史 4 中央ユーラシア史』 (山川出版社、2000)
- 20 . 坂本勉 『未完のトルキスタン国家』 (講談社、1996)
- 21 . 杉山正明 『遊牧民から見た世界史』 (日本経済新聞社、1997)
- 22 . 杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後 興亡の世界史 第9巻(2008)、講談社学術文庫(2016)』 (講談社、2008、2016)
- 23 . 杉山正明 『「婿どの」たちのユーラシア』 (講談社、2016)
- 24 . 杉山正明 『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』 (講談社学術文庫、2016)
- 25 . 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡 (上、下)』 (講談社、35205)

## 参考文献 -2

- 26 . 陳舜臣 『世界の都市の物語 イスタンブール』 (文春文庫、 36039)
- 27 . ツルティム・ケサン、正木晃 『増補チベット密教』 (ちくま学芸文庫、 39569)
- 28 . 寺島実郎総監修 『モンゴル帝国とユーラシア史: 社会人・大学院生・学生の目線からのグローバルヒストリー (多摩大学インターゼミ教育研究業績シリーズ)』 (多摩大学出版会、 2023)
- 29 . 寺島実郎 『人間と宗教——あるいは日本人の心の基軸』 (岩波書店、 44501)
- 30 . 野田仁 『露清帝国とカザフ=ハン国』 (東京大学出版会、 2011)
- 31 . 羽田正 『イラン史』 (山川出版社、 2020)
- 32 . 平野聡 『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』 (名古屋大学出版会、 38169)
- 33 . 平野聡 『大清帝国と中華の混迷』 (興亡の世界史 第17巻) 講談社、 39356)
- 34 . 三上次男 『陶磁の道—東西文明の接点をたずねて—』 (岩波書店、 25416)
- 35 . 三上次男ほか 『出光コレクションの名品から 陶磁の道』 (出光美術館、 36617)
- 36 . 三杉隆敏 『マイセンへの道 東西陶磁交流史』 (東書選書、 33878)
- 37 . 森安孝夫 『シルクロード世界史』 (講談社、 2020)
- 38 . 早稲田大学モンゴル研究所(編) 『モンゴル史研究——現状と展望』 (明石書店、 2011)

# 参考文献 -3

## 【論文: 計29件】

- 1 . Gier, Nicholas F. 『From Mongols To Mughals: Religious Violence In India 9th-18th Centuries』 (University of Idaho、 2006)
- 2 . Gopal, Mohan 『India & Mongolia in the Middle Ages – More Than Just a Connection』 (Ancient History of Asian Countries, p56-60.、 2019)
- 3 . 井谷鋼造 『トルコ民族の活動とモンゴル支配時代』 (山川出版社、「イラン史」 p.47-105、 2020)
- 4 . 姚大力 『元朝在中国 历史上的意义』 (、 2018)
- 5 . 张文德 『论伊斯兰教对中亚帖木儿王朝的影响』 (《历史档案》第1期、 2007)
- 6 . 小笠原弘幸 『オスマン王権とその正統性——血統』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀」、 2023)
- 7 . 川口琢司 『キプチャク草原とロシア』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 11「中央ユーラシアの統合—9-16世紀」 p.275-302、 1997)
- 8 . 川口琢司 『カラチュの時代—ティムール朝を中心に』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——一〇～一四世紀」 p.295-311、 2023)
- 9 . 久保一之 『ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史第11「中央ユーラシアの統合—9-16世紀」 p.147-176、 1997)
- 10 . 小谷汪之 『ムガル帝国とマラーターの時代』 (山川出版社、 新版世界各国史 7「南アジア史」 p.232-272、 2004)
- 11 . 小松香織 『海運資料に見るオスマン帝国末期の社会変容』 (イスラーム地域研究ジャーナル Vol. 5、 2013)
- 12 . 近藤信彰 『サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀」、 2023)
- 13 . 島田竜登 『構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史11「構造化される世界 14-19世紀」 p.3-62、 2022)
- 14 . 志茂碩敏 『モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史11「構造化される世界 14-19世紀」 p.249-274、 1997)
- 15 . 新藤義彦 『モンゴル・タタールのロシア支配』 (アジア研究所紀要 4 (1977年)、 p.129-150、 1977)
- 16 . 杉山正明 『中央ユーラシアの歴史構図』 (岩波書店、 岩波講座世界講座11「構造化される世界 14-19世紀」 p.3-89、 1997)
- 17 . ソウザ、ルシオ・デ、岡美穂子 『奴隷たちの世界史』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史11「構造化される世界 14-19世紀」 p.131-160、 2022)
- 18 . 中見立夫・濱田正美・小松久男 『中央ユーラシアの周縁化』 (山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.143-p.173、 2000)
- 19 . 羽田正 『ペルシア語文化圏の形成と変容』 (山川出版社、「イラン史」 p.106-159、 2020)
- 20 . 濱田正美 『中央ユーラシアの「イスラーム化」と「テュルク化」』 (山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.277-p.341、 2000)
- 21 . 林佳世子 『西アジア・南アジアの近世帝国』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史13「西アジア・南アジアの帝国—16～18世紀」、 2023)
- 22 . 堀川鞆 『モンゴル帝国とティムール帝国』 (山川出版社、 中央ユーラシア史 p.174-p.244、 2000)
- 23 . 真下裕之 『ムガル帝国における国家・法・地域社会』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀」 p.115-148、 )

# 参考文献 -4

- 24 . 松田孝一 『モンゴル帝国の統治制度とウルス』（岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀」 p.77-106、 2023)
- 25 . 矢崎正見 『チベットに対する元朝の宗教政策』（立正女子大学短期大学部 研究紀要 第14集 p.56-64、 2012)
- 26 . 山崎岳 『アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生』（岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」 p.163-182、 2022)
- 27 . 山下範久 『一四—一九世紀における「パワーポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容』（岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」 p.63-96、 2022)
- 28 . 吉澤智也 『記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開—21世紀のパクス・モンゴリカを求めて—』（日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33、 2017)
- 29 . 四日市康博 『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』（岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀」 p.40-76、 2023)

# 年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	2024/4/13	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己紹介</li> <li>今年度テーマ方向性</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>春学期スケジュール確定</li> <li>参考文献) モンゴル帝国と長いその後</li> </ul>	
2	2024/4/20	<ul style="list-style-type: none"> <li>参考資料を読んだの問題意識発表(1)</li> </ul>	杉、二本柳、佐々木	モンゴル帝国と長いその後	<ul style="list-style-type: none"> <li>メンバー確定</li> </ul>	杉
3	2024/4/27	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゼミ長・副ゼミ長確定</li> <li>問題意識発表(2)</li> </ul>	菅沼、阿達、小柳、高、禹	モンゴル帝国と長いその後	<ul style="list-style-type: none"> <li>連絡用Classroom作成(須貝)</li> <li>共同作業用Google Drive設定(杉)</li> <li>過去資料共有(杉)</li> </ul>	須貝
4	2024/5/11	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題意識発表(3)</li> </ul>	山中	モンゴル帝国と長いその後	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究計画発表準備開始(ゼミ長・副ゼミ長)</li> </ul>	小柳
5	2024/5/18	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題意識発表(4)</li> <li>研究計画発表へ向けたスケジュール共有</li> </ul>	須貝 二本柳	モンゴル帝国と長いその後	<ul style="list-style-type: none"> <li>役割分担確定</li> </ul>	二本柳
6	2024/5/25	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題意識集約</li> <li>テーマ案検討</li> </ul>	ディスカッション			佐々木
7	2024/6/1	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマ案確定</li> <li>フィールドワーク案確定</li> <li>発表資料骨子検討</li> </ul>	〃			高
8	2024/6/8	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究計画発表資料確定(最終調整)</li> <li>発表リハーサル</li> </ul>	〃	<ul style="list-style-type: none"> <li>大使館訪問調整</li> <li>研究者インタビュー調整</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表役割&amp;予演日程確定</li> </ul>	倉元
9	2024/6/15	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>研究計画発表</b></li> </ul>				佐々木
10	2024/6/22	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間発表準備</li> </ul>	ディスカッション	個人テーマ研究報告	大使館訪問・研究者インタビュー調整	阿達
11	2024/6/29	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間発表準備</li> </ul>	杉、倉元、	〃	〃	菅沼
12	2024/7/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間発表準備</li> </ul>	菅沼	〃	〃	禹
13	2024/7/13	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間発表準備</li> </ul>	山中、佐々木 二本柳、高	〃	〃	山中
14	2024/7/20	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間発表準備</li> </ul>	阿達、禹	〃	〃	須貝
15	2024/7/27	<ul style="list-style-type: none"> <li>中間発表準備</li> </ul>	須貝、小柳	〃	〃	小柳
16	2024/8/29-30	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>合宿・中間発表</b></li> </ul>				二本柳

# 年間スケジュール 秋学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	2024/9/21	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己紹介</li> <li>春学期成果共有</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>秋学期スケジュール確定</li> <li>最終メンバー確定</li> </ul>	
2	2024/9/28	<ul style="list-style-type: none"> <li>追加メンバー問題意識発表</li> </ul>				
3	2024/10/5	<ul style="list-style-type: none"> <li>追加メンバー問題意識発表</li> </ul>				
4	2024/10/12	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題意識集約</li> </ul>				
5	2024/10/26	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題意識集約</li> </ul>				
6	2024/11/2	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料骨子検討</li> </ul>				
7	2024/11/9	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料骨子確定</li> </ul>				
8	2024/11/16	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料準備</li> <li>論文準備</li> </ul>				
9	2024/11/23	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料準備</li> <li>論文準備</li> </ul>				
10	2024/11/30	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料準備</li> <li>論文準備</li> </ul>				
11	2024/12/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料準備（最終調整）</li> <li>論文準備（最終調整）</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>発表役割&amp;予演日程確定</li> </ul>	
12	2024/12/14	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>Active Learning発表祭</b></li> </ul>				
13	2024/12/21	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>最終発表</b></li> <li><b>年内論文提出</b></li> </ul>				
14	2024/1/11	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終調整</li> </ul>				
15	2024/1/18	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終調整</li> </ul>				
16	2024/1/25	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>論文最終提出16:00</b></li> <li><b>懇親会17:00～</b></li> </ul>				